

# 秋のたより

発行 我孫子市民図書館  
〒270-1147 我孫子市若松26の4  
電話04-7184-1110

—330年前の旅に  
思いを馳せる—

## 奥の細道

芭蕉と曾良の旅立ちは1689年3月。  
あまりにも有名な2人のこの旅から、来年で330年が経ちます。  
「奥の細道」とは、どこからどこに、なんの目的で行った旅なのか？  
2人が各地で見た風景とは？  
出会った人々とは？  
電車や車はもちろんのこと、道だって整備されていなかった  
江戸時代の旅に思いを馳せてみませんか？



芭蕉像／中尊寺

<旅先で詠んだ芭蕉の句：いち例>

閑さや岩にしみ入蟬の声（山形・立石寺）

五月雨をあつめて早し最上川（山形・大石田）

荒海や佐渡によこたふ天河（越後・出雲崎）

この三句はみなさんよくご存じなのではないでしょうか？  
長い旅の最中にはほかにもたくさん句を詠んでいます。  
句だけではなく紀行文も残した芭蕉の旅をぜひ味わって  
ください。

### 『おくのほそ道の旅』

萩原恭男・杉田美登/著 岩波書店

半年にわたる芭蕉の長旅を、著者が自らの足でたどった書である。その土地の歴史や旅先での芭蕉の心情を詳しく解説しているので、五・七・五から見える景色がより鮮やかに目に浮かんでくる。老境に入ろうという年齢で旅立ち、自身の文学を高め、その生涯を俳諧一筋で貫いた芭蕉の言葉は胸に響く。



おくのほそ道の地を訪れる際は是非とも本書を読んでほしい。目に見える景色は違えど、芭蕉ら先人の思いを確かに感じるはずだ。

世界遺産で有名な 平泉中尊寺  
光堂での一句

五月雨の降残してや光堂



中尊寺金色堂

# 『芭蕉自筆「奥の細道」の謎』

上野 洋三／著 二見書房（絶版）

幻とされてきた芭蕉自筆の『奥の細道』が250年ぶりに発見されたニュースは1996年11月、NHKで報じられた。世界的なスクープとなったこの発見は、5年にわたり取材されていた。芭蕉の研究者である著者は、芭蕉の文字が自筆であることを証明するため、1万641字を検証する。



綴じられていた原本が一枚一枚解体され、専門家の知識や技術を用いて総点検した筆蹟判定の詳細を記録する。また、『奥の細道』のテーマや句の配置や芭蕉の周辺の出来事から、執筆の動機を推測する。

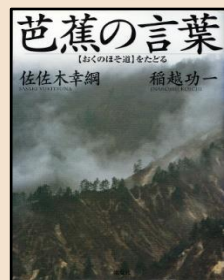
報道後も著者は、残された疑問を解くために調査を続ける。芭蕉の書いた一字一字を見つめ、読み、楽しむことを教えてくれる一冊である。

# 『芭蕉の言葉』

佐佐木 幸綱／文 淡交社

「おくのほそ道」は、46歳の松尾芭蕉がその門人曾良とたった2人で行った、期間にしておよそ5ヵ月、距離にして約2400kmにおよぶ旅の記録である。

この本では、稲越氏の写真を随所に織り込みつつ、おくのほそ道の旅を順にたどる。そこで詠まれた俳句の裏側にあった芭蕉の心情や時代背景などを、佐佐木氏が一句一句丁寧に解説、時に推察も交え、ひも解いていく。芭蕉と曾良によりそった一冊である。



# <奥の細道旅路>

千住を出発し北上。まず北関東の各地を訪れ、東北の地へ。松島や平泉などの景勝地をめぐり、太平洋側から日本海側へ横断していく。その後は新潟から北陸へ向かい、大垣が最終地点である。

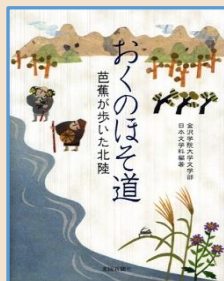


大垣

# 『おくのほそ道』

金沢学院大学文学部日本文学科／編著 北國新聞社

松尾芭蕉が各地の名所を巡り歩くこと、芭蕉俳諧の教をを広めることを目的とした旅の記録「おくのほそ道」。その旅の後半、他の地域に比べ、約一か月と長い期間を過ごした加賀滞在を含む北陸の旅を訪ね歩く。芭蕉が歩いたゆかりの地の、人たちの話を交え詠まれた句からその心情を読み解く。



旅全体の行程図、芭蕉を取り巻く人々の紹介、おくのほそ道における“基本のこたば”なども掲載され、古典や俳句にあまり親しみのない人にもわかりやすい。

# 奥の細道の旅を知る

各地の現在の風景と、旅を深める異色の研究書をご紹介します。



象潟



鳥海山



塩竈明神



松島



出羽三山神社

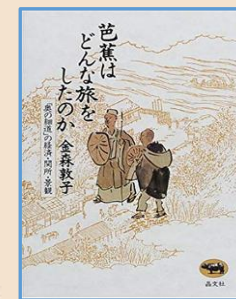


那古の浦付近

# 『芭蕉はどんな旅をしたのか』

金森 敦子 著 晶文社

芭蕉と曾良は実際にどのような旅をしていたのか。いまだ正確には解明されていない「奥の細道」の旅を著者は「曾良旅日記」や後世の商人や武士によって書かれた紀行文をもとに、丹念にたどっていく。旅費はどのくらい用意していたのか、旅衣装や荷物はどのようなものを持って行ったのか、関所や番所は問題なく通過できたのかなど、現代とは違い苦勞の多い辺境の地への旅を推理していく。旅立ちから330年を経てもなお人々を引き付ける「奥の細道」の旅を文学とは違う側面から読み解いた、類をみない一冊。



千住



最後に芭蕉を深めるもう一冊

## 『芭蕉ハンドブック』尾形 侑／編 三省堂



松尾芭蕉について知りたいことがあるならば、この一冊はかかせない。

第一部では芭蕉の出自から人生を、時代背景を踏まえて解説し、現代での評価までを語る。

第二部は鑑賞辞典として、芭蕉の発句・連句・紀行文・日記・俳文・書簡・俳論等の各分野ごとに、代表的な作品や部分を取り上げ、口語訳・注解とともに簡単な評釈をつける。

第三部は語彙辞典。国名（当時の地名）や人名ならば知っているものもあるだろうが、季語や歌枕、俳論用語まで、芭蕉作品の例文を挙げて端的に説明されているので、俳句を学ぶ人にとっても参考になる。代表的な「侘び」「さび」や芭蕉が好んで使った言い回しなども示す。

第四部は資料編。芭蕉と親交のあった門人・友人を中心に二十七人を選んで詳しく紹介した「芭蕉をめぐる人々」や略年譜を収録。また「芭蕉紀行足跡図」では五作品で芭蕉が旅した場所を地図に記した。まさに“芭蕉ハンドブック”である。

<編集後記にかえて>

## 旅立ちの地を訪ねてみました！

元禄二年旧暦の三月二七日（現在の五月十六日頃）、江戸・深川の庵をでた芭蕉は船で千住に向かいました。これが『おくのほそ道』の旅の始まりです。文中には「千しゆといふ所にて船を上がれば、前途三千里の思ひ、胸にふさがりて、幻の暮に離別の涙をそそぐ」と千住からの旅立ちの情景が描かれています。その千住の船着場は千住大橋の袂にあり、現在は足立区立「大橋公園」になっています。

旅立ちの一句 行春や鳥啼魚の目は泪

芭蕉が旅の最初にこのような別離の句を詠んだことから、史跡として

「奥の細道 矢立初めの地」の碑が建てられています。

※ 矢立：筆と墨壺を組み合わせた携帯用の筆記用具のこと。



現在の千住大橋は、かつての位置からは少し移っていますが、150日間、およそ2400kmに及ぶ旅の出発点をみなさんも訪れてみてはいかがでしょうか？周辺には様々な史跡や碑があり、じっくりと楽しめます。

貝 我孫子からは、JR常磐線各駅停車上り方面行に乗車して、町屋駅で京成本線に乗り換え、千住大橋駅で下車。大橋公園までは徒歩5分ほどです。

